

## Ⅱ キリスト教思想史の諸問題

### ＜前回＞ 自然神学と12世紀ルネサンス

1. 古代からの制度化・国教化の過程の現実とイエス運動の宗教理念→ダイナミズム
2. 中世社会の力学：教会と国王、都市と農村、キリスト教とイスラーム
3. 中世社会の変動と新しい宗教性の展開
  - ・農業革命 → 都市の発展 ・都市民衆の宗教性 ・異端的民衆運動と教会の対応
4. 中世科学の発展：イスラーム科学 → 12世紀ルネサンス  
イスラームとの共存から対立へ、アラビア科学の導入と開化
5. スコラ的な文化総合、階層的秩序：自然と超自然の区別と調和
6. 自然神学：世界の秩序の探求から神へ、神の存在論証
7. 中世で統一的な知の世界（神の創造した合理性の客観化）  
神学（啓示神学）／神学（自然神学）／哲学／自然学・諸科学
8. フィオーレのヨアキム（1130頃～1202）
9. 聖書解釈から歴史理論（三位一体論：内在的 → 経綸的・歴史的）
  - ・神が歴史を支配する ・聖書がそれを語っている
 ヨアキムの歴史解釈
  - ・父の時代／子の時代／聖霊の時代 ・三つの時代の相互内在 → 歴史の弁証法
  - ・未来としての聖霊の時代

## 第3講：中世キリスト教と宗教改革

### 2 宗教改革とガリレオ裁判

#### （1）宗教改革

##### 1. プロテスタンティズムとは何か

宗教改革はプロテスタント教会の歴史的出発点であるが、宗教学的に考えた場合、「プロテスタンティズム」に関しては、次の三つの意味を区別することができる。

- ・原理としてのプロテスタンティズム（宗教史の構成要素）
  - 一定の歴史・伝統を有する宗教においては、キリスト教の宗教改革に相当する動きはかなり普遍的に確認できる。この観点かと言えば、「宗教改革」とは、伝統の墮落・変質に対して本来の精神に復帰する運動（原点回帰による共同体の刷新）と定義できるであろう。日本宗教史で言えば、鎌倉新仏教は日本仏教の宗教改革と解することができる。宗教改革は、「原理主義的」？。
- ・歴史的プロテスタント（教派・組織として）
  - ルターの宗教改革の歴史的影響下で成立した諸教派や諸運動は、歴史的な意味で、あるいは第一義的な意味で「プロテスタント」と呼ぶことができる。
- ・プロテスタント時代（プロテスタント教会の存在によって構造が規定された時代）
  - ルターの宗教改革は、キリスト教世界（西欧の！）を二分するものとなり、プ

ロテスタントとカトリックの対立構造は、西欧近代のキリスト教を根本的に規定することになった。この対立構造に規定された近代は、プロテスタント時代も言うことができる。しかし、プロテスタントとカトリックの対立が現代のキリスト教の状況の主要な規定要因ではないとすれば——プロセス神学者カブは、キリスト教の状況は、妊娠中絶、女性の叙階、同性愛などをめぐる対立要因によって規定されていると述べている——、現在においてプロテスタント時代の終焉を迎えたということも可能である（これは、1930年代頃のパウル・ティリッヒの見解である）。

## 2. 宗教改革（ルター、ツヴィングリ、カルヴァンら）とその広がり

1517年10月31日、マルティン・ルターは、当時ザクセンで大々的に売り出されていた贖宥状（いわゆる免罪符）に対して、ヴィッテンベルク城教会の扉に「95箇条の提題」を貼りだし、贖宥についての学問的討論を提起した。それは、カトリック教会の破門決定にもかかわらず、最初の意図を越えてヨーロッパ各地に広がっていった（思いがけない波及効果）。これは、中世後期には、ルターの問題意識に共鳴する思想状況が広く存在していたことを意味しており、宗教改革はルター個人の活動に還元できない歴史的動向と言わねばならない。

## 3. 宗教改革の思想内容（三大スローガン）

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり（例えば、聖餐論争）、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。

「信仰のみ」（信仰義認論）、「聖書のみ」、「万人司祭説」

これら三つのスローガンはそれぞれ内的に関連し合っており、ばらばらに理解すべきではない。

## 4. 人間は何によって救われるのか？

### ・行為義認

人間は善行によって救われる。義人は救われる。何が善行であるかの内容は宗教において様々であるが（宗教儀礼に参加すること、隣人愛を実践すること、毎日祈り聖書を読むこと、献金を捧げることなどなど）、ほとんどの宗教において、行為義認に類した考えは確認可能である。

Q：行為義認と因果応報説の関係を論じよ。

- ・問題は人は救いに十分なほどの善行を実行できるか、あるいは救いを実感できるのかという点である。ルターは修道院で苦行を実践するが、ついに救いを実感できず、精神的に追い詰められる中で、善行による救いについて根本的な懷疑に至る。贖宥状への疑問はこの文脈から出されたものである。

贖宥の論理：通常の間人は天国に行くだけの善行を積むことはできず、死後、煉獄に行く（もちろん、十分な悪人は地獄へ行く）。この背後には、罪の実体論的理解、つまり、いわば罪を物的に理解する古い罪感覚が存在する。汚れ（けがれ）は汚れ（物的なよごれ）であり、罪人にふれると感染し（義人

は罪人とは食卓を共にしない)、水で清めることができる。罪が物的あることに対応して、それを打ち消す善行(功德)も物的である。両者ともに計量可能、移動可能、蓄積可能である。聖人は、死後直ちに天国に行けるほどの功德を積んでいるが、その功德はその聖人個人の罪を打ち消して余りあるほどであり、罪を打ち消した余剰分は他の人々に分与可能なものとして「教会」に貯蓄される。こうして、贖宥状をお金で購入し、この蓄積された功德を教会から分け与えられることによって、今は煉獄にいるたとえば親族の救いに資すること(煉獄期間を短縮すること)が可能になる。

- ・ルターは、最終的に、人間の救いは心からキリストの贖罪を信じることによってのみ可能になるとの結論に到達する。これが、「信仰のみ」というスローガンの意味である(信仰義認論)。このような罪と救いの理解は、新約聖書のパウロに遡り、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。

cf. 法然や親鸞の思想と比較せよ。

- ・信仰義認論は、罪や恩寵についての実体論物的理解から、信仰者と神との関係論(罪や恩寵の精神性・内面性)への転換といえる。信じる心の純粹さという個人の人格性が問われることになる。

Q: 以上の転換は、錬金術から化学・心理学への移行と、どのように関係づけられるだろうか。

- ・もはや、救いは教会制度において媒介されるのではなく、神と個人との関わり合いにおいて成立することになり、またこの救いのあり方は、聖職者でも一般信徒でも変わらないことになる。ここに、「万人司祭」説が帰結する。人間は救いに関しては、神の前で平等である。これは、イエスの宗教運動における徹底的な平等主義理論の具体化と解することも可能である。
- ・「信仰のみ」は救いが自己の信仰的決断の事柄であること、つまり自己決定の問題であることを意味する。しかし、自己決定は情報公開が前提にされねばならない(宗教改革の精神はきわめて近代的である!)。この救いに関する知識の情報公開に対応するのが、「聖書のみ」のスローガンに他ならない。救いの知識は、権威ある他者から伝達されるのではなく、自分で聖書を読むことによってもたらされる。

## 5. 理念と現実の緊張

三つのスローガンによって示された宗教改革の精神は、「理念」であって、ここに、キリスト教史において広範に確認可能な理念と現実のずれを指摘しなければならない。たとえば、聖職者と一般信徒との平等性の理念にもかかわらず、階層的秩序に類したものは宗教改革的伝統に立つ教会にも存続している。それは、信仰の自己決定と聖書の情報公開に関しても同様である。

Q: 農民戦争に対するルターの対応を、この観点から論じよ。

## 6. たとえば、「聖書のみ」(聖書主義)の理念が歴史的な現実となるには、数百年の時

間が必要であった。

聖書の近代語への翻訳／印刷技術の普及と出版システムの確立／初等教育の普及（識字率）

#### 7. 市民社会の宗教としてのプロテスタンティズム

「聖書のみ」の理念の実現のプロセスからわかるように、宗教改革の普及は、西欧世界の近代化プロセスと基本的に重なり合うものである。

聖書の近代語への翻訳 → 西欧国民文化の基礎

#### 8. 近代的な自律性や人格性（人権）といった理念の成立基盤

宗教改革の精神 → 自立した個人と自由・平等（理念）

西欧的な政治と経済のシステム

近代議会制民主主義（リンゼイ・ターゼ）

近代資本主義・市場経済（ウェーバー・ターゼ）

近代科学（マートン・ターゼ）

#### 9. 近代的な世俗性への二面的な関わり

17 世紀までの過程の中で、近代世界の基盤（議会民主主義、資本主義、近代科学などの近代のサブシステム）は形成され、その背後に宗教改革的な精神性の作用が確認できる。しかし、一端成立した近代は、そのいわば母体であるキリスト教から自立し、それ自身の原理で動き始める（自律性、聖俗革命）。ここに、近代とキリスト教の二面的関係が成立する。とくに、18 世紀以降、近代精神はキリスト教への批判を強め（啓蒙主義）、キリスト教はそれへの対応を求められることになる。

18 世紀以降の動向は次のようにまとめられる。

・近代性への適合 → 世俗主義の台頭と譲歩

合理的な宗教思想（理神論やユニテリアン）

・近代的世俗性に対する批判運動（敬虔主義、メソジスト、ペンテコステ運動、さらにファンダメンタリズム）

### （2）ガリレオ裁判とは何か

#### 10. ガリレオ裁判を「宗教と科学との関係史」の観点から見る。

宗教と科学の対立図式は 19 世紀（1880 年代）の産物である。

#### 11. 典型的な誤解：バートランド・ラッセルは『西洋哲学史』で次のように主張している。

「同様にカルヴァンは、『世界は固く据えられ、決して揺らぐことはない』（詩編 93 編第一節）というテキストによって、コペルニクスを論破し、次のように声を大にして非難した。『誰が聖霊の権威の上にコペルニクスの権威を敢えて置こうとするのか』、と。」（Bertrand Russell, *History of Western Philosophy*, Unwin Paperbacks 1980(1946)。本文の引用は、時間の関係上、原書の 515 頁から引用者の私訳で行ったが、邦訳としては、市井三郎訳『西洋哲学史』（みすず書房）が参照できる）。

つまり、ここに見られるのは、宗教改革と近代科学、さらに一般化すれば、キリスト教と科学は歴史的に対立してきた、というやや通俗的とも言える見解であり、ガリレオ裁判はその典型例としてこれまで挙げられてきた。

#### 12. 最近のガリレオ研究（芦名定道『宗教学のエッセンス』北樹出版、176-177 頁）によ

って、以上の単純な対立図式の事例としてのガリレオ事件という見方は大きく修正されてきている。そもそもガリレオ自身、キリスト教徒（カトリック）としての自分の信仰と地動説とが対立すると考えていたとは思にくい。対立は、教会的権威と個人の信仰との間に存在するのであって、キリスト教と科学との間に存在するわけではない。

13. 以上の点は、ラッセルが引き合いに出しているカルヴァンにおいて確認できる（とくに、マクグラス『科学と宗教』教文館、を参照）。カルヴァンの『創世記注解』において展開される「適応の原理」（神は受け手の水準に合わせて知識を伝達する。科学者には自然現象についての数学的に定式化された法則を通して、他の人々には、聖書の物語的語りにおいて。この二つの伝達方法は異なるが、内容的に両者の間に矛盾はない）は、宗教と科学の対立という事態を回避可能にするものであって、実際、カルヴィニズムの伝統からは、近代の自然科学の担い手が現れた。なお、この「適応の原理」は、カルヴァンの発明ではなく、古代のキリスト教思想に遡り、また近代思想にも継承されている。

14. カルヴァン：「適応の原理」（principle of accommodation）

カルヴァン『創世記注解』

「モーセは、常識ある普通人の誰しもが教えられなくても理解できるような事柄を平易な文体で記述した。しかし天文学者は、人間精神の賢明さが理解できる限りの事柄を苦勞して探求する。しかしながら、この研究は神に見捨てられるべきものではなく、また、この科学を、自分の知らない事柄は何でも勝手に退けようとする血迷った人々がいるという理由で非難すべきではない。なぜならば、天文学は、喜びを与えるだけでなく、その知識は有用だからである。この学問が神の驚くべき知恵を示すということは否定できない。……モーセは、学識ある人々のみならず、無学で無教養な人々をも教える教師として定められているのであるから、こういうきめの粗い教え方をするところまで身を低めなければその役割を果たすことができなかったのである。」

(John Calvin, *Commentaries on the First Book of Moses called Genesis* (translated by the Rev. John King, M.A.) volume First, The Edinburgh Printing Company 1847, p.86)

15. では、どうしてガリレオ裁判は避けられなかったのか。カトリック教会はなぜ天動説に固執したのか。

これを理解するには、ガリレオ裁判が、ティリッヒの言うプロテスタント時代に起こったことに注目しなければならない。ガリレオ裁判の背後にあるローマ・カトリック教会とプロテスタント諸教派との対立の焦点は、聖書解釈にあった（パウロの信仰論の解釈など）。ローマ・カトリック教会は、プロテスタント的な新解釈に対して、古代の教父の聖書解釈に遡る伝統的解釈の正当性を主張した。この伝統的解釈は、古代から近代に至る天動説的な世界観の枠組みでなされており、天動説はその意味で伝統的解釈（聖書自体と言うよりも）に属していた。プロテスタント的な新解釈に対して伝統的解釈を擁護する上で、ガリレオが行った地動説の提唱（これもコペルニクス的な新解釈）はどうしても認めることはできなかったのである。

## <参考文献>

1. ルター 『キリスト者の自由・聖書への序言』岩波文庫

2. 金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書  
『ルターの宗教思想』日本基督教団出版局  
『ルターとその時代』玉川大学出版部  
『近代人の宿命とキリスト教一世俗化の人間学的考察』聖学院大学出版会
3. A. E. マクグラス『宗教改革の思想』教文館  
『科学と宗教』教文館
4. 芦名定道「P.ティリッヒとプロテスタンティズム論の問題」『日本の神学』第25号  
1985年 日本基督教学会  
「キリスト教」「プロテスタント」、大貫隆他編『岩波 キリスト教辞典』（岩波書店）、305-306 頁  
『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房
5. 伊東俊太郎『ガリレオ』講談社